

# 「えほん館」出版 Project!!

鋤柄真希子の絵本

## 『ねこはねこのゆめをみる』

近日発売。定価 ¥1,800 (+Tax)



Sukimaki Newspaper PAROLE Vol.5 | August 19, 2023

<https://sukimaki.com>

@sukikara\_makiko



SUKIMAKI  
ANIMATION

パ  
ロ  
ル  
vol.  
5

無料

現在、出版に向けてクラウドファンディング

(MOTIONGALLERY)を行っています。

期間は11/30(木)まで。特典多数!ご興味のある方は  
ご賛同よろしくお祈いします。



<https://motion-gallery.net/projects/nekoyume>

「えほん館」出版プロジェクトは、36年にわたり絵本の素晴らしさや大切さを伝えるため多岐にわたる活動を行ってきた花田睦子(絵本・児童書専門店「えほん館」代表)のプロジェクト企画です。絵本には読み手の愛が勝手に伝わり、勝手に聞き手の心の奥深くに残り続けてしまうという非常に不思議な魅力があります。これまで様々な絵本に出会い触れ合ってきた花田が、絵本の可能性をさらに広げべく自ら企画・出版を手掛ける初めての試みです。

プロジェクト第一弾は、動物や植物をモチーフに人間中心の世界とは異なる新たな視点を描いてきたアニメーション作家・鋤柄真希子(SUKIMAKI ANIMATION 主宰)。現在制作中のアニメーション作品『LUNATIC PLAN(e)T』。その本編でこぼれ落ちた前日譚を鋤柄自身初となる絵本として描きます。絵本『ねこはねこのゆめをみる』(文は松村康平が担当)は「猫は猫にしか生まれ変わらない」という寓話をもとに、寝てばかりいる猫が夢をうつつを溶け合わせいったい何を感じているのかを想像するお話です。断片的な文章で綴られた情景は、絵を読むことで言葉が生まれる前の状態に聞き手を誘い「壮大な命の物語」を感覚的に語りかけます。

語りかけられた子どもたちがどう感じ何を思うかは自由。それがその子の物語であり、それを大切にしてもらいたいという願いが込められています。アニメーションでは伝えきれない表現や思いを、いまを生きる子どもたちに絵本という根源的なツールで届けます。

またこのプロジェクトは、町の本屋さんで書籍を自主的に制作するという未来の書店の在り方を模索する実践でもあります。電子書籍やネットショップの普及により、本屋さんにふらりと立ち寄って知らなかった本に出会うという経験が少なくなっていました。その一方で、ZINEや同人誌など独自の文化が確実に育ち人々に求められています。町の本屋さんが主導して本を制作することは、リトルプレスが持つ価値に加えフィジカルに本屋さんに行くきっかけをもたらしてくれます。本を介して人々が交流する開かれた場所を作り出し、地域コミュニティへの貢献を目指します。

(\*プロジェクトの一環として、学校に行くのが苦手なあるいは困難な子どもたちの居場所づくりを目指して、京都で活動する「カンガルーハウスをつくらう会」にご賛同いただいた支援金の一部を寄付いたします。)

### えほん館

1987年から続く絵本・児童書専門店。絵本・児童書を中心に約3,000点を揃えた店舗「京町家えほん館むむむ」の運営と、代表花田睦子による講演会や講座、出張販売を通して、絵本の重要性と絵本の力を伝えています。あかちゃんから大人まで、全ての人に絵本を♪

### SUKIMAKI ANIMATION

2007年に鋤柄真希子が立ち上げたアニメーション・スタジオ。2010年以降は松村康平と共にマルチプレーン撮影機を使った短編アニメーション作品を制作している。現在、動物と植物が織りなす宇宙を舞台にした新作SFファンタジー『LUNATIC PLAN(e)T』を制作中。

SUKIMAKI ANIMATION 上映のお知らせ

## みちくさ映画祭 Short Film Festival in Numazu 2023. 8/27(日)

沼津のまちなかを巡りながら、今まで出会ったことのない映画の数々を、みちくさするように観る映画祭にて、「深海の虹」が上映されます。

チケット：一般 ¥2,000 高校生以下 ¥1,000



## こま井亭 × スキマキアニメーション

2023. 9/18(月) ①11:30- ②14:30- ③18:00-

百年続く老舗の肉屋が営む京都先斗町京風すき焼き「こま井亭」にてアニメーション上映会を行います。当日は、イベント特別軽食メニュー有り。

入場料：¥500(ソフトドリンク1杯付) \*お食事は別料金(¥1,500~)となります。

対象年齢：7歳(小学生)以上





# 絵本とは、読んでもらう本である。

講演に出向くようになって約20年、私が変わらずに伝えている一番大切な事です。  
 読んでもらう本＝読み手と聴き手で楽しむ本です。  
 これは字が読めようが読めまいが関係ありません。大人でも、絵本は読んでもらってください。自分で読んではいけないという事ではなく、もちろん自分で読んでもOKです。  
 むしろそういう絵本もあります。でも基本的に絵本は読んでもらうように作られているのです。  
 自分で読むのと読んでもらうのとの大きな違い、自分で読む事では絶対に出来ない事、それは絵を見ながら耳から生の声で語られるお話が入ってくるという「同時体験」です。  
 いえ、「瞬時体験」です。  
 この「瞬時体験」をするからこそ、絵本の絵が聴き手の子ども達の頭の中で動くのです。

絵本の特徴、それは「絵が語っている」事です。その語っている絵を読めるのが子ども達です。文字を覚えるまでの子ども達は、特に絵を読む力が育ちます。絵本は、絵を読まない、本当に絵本を読んだことにはなりません。  
 絵を見ながら耳から生の声で語られるお話が入ってくる「同時体験」によって、「語っている絵を読む」ことができ、本当の意味での「絵本体験」ができるのです。



絵本・児童書専門店「えほん館」との共同企画

## 絵本『ねこはねこのゆめをみる』

どうして子どもは寝るのを嫌がるのだろうか。もっと遊んでいたいから？夢の世界が怖いのか？なかなか寝てくれない息子に疲れ果て、つい「早く寝ないとお化けがくるよ」と最終手段を使ってしまう日々。息子が赤ちゃんの頃、数時間おきに寝て起きるを繰り返していた。寝て起きる度にぐんぐん成長した。それは本当にびっくりするようなスピードだった。3歳になった今も眠りと成長は直結している。息子にとって夢の世界は現実と同じ重さで存在し、夢での経験が息子を成長させているのかもしれない。私の短い1日に息子の長い1週間が詰め込まれているような感覚。寝て起きた後は確かに息子なのだけど、寝る前のあの子とは違っている。息子が寝るのを嫌がるのは、最後の別れを惜しんでいるからなのかもしれない。朝が来るとこの子にはもう二度と会えない。そう思うと今この瞬間の息子と過ごす時間がとても愛おしく思えてくる。

ねこは私とは違う時間と空間を生きているのかもしれない。不意に現れたりいなくなったり、突然怒ったり甘えてきたりするから、瞬間移動したのかあるいは違うねこに入れ替わったんじゃないかと思ってしまう。ねこがこちらをじっと見つめてくることがある。目が合っているのに目が合っていないような感じで、正面から見られているのに同時に後ろから見られているような不思議な感覚。私には見えていない私の何かをじっと見ている。私たち人間の時間は過去から未来へと一直線に進む。進みっぱなしで戻ることはいない。ねこの時間は線ではなくて点で、過去から未来へと順番に進むのではなく、時間を自由に行き来し、複数の時間に同時に点在している。過去や未来を同時に経験しながら、今この瞬間を生きている。ねこにとって夢をみるということは、時間を行き来する移動手段なのかもしれない。そんな想像を膨らませながら絵本『ねこはねこのゆめをみる』を作っている。

絵本『ねこはねこのゆめをみる』を寝る前に子どもと一緒に読んで欲しい。言葉の響きや絵の空気を子どもと一緒に感じ、過去や未来に囚われている心を、今一緒にいる子どもに向けてもらえたらいいと思う。

( 鋤柄真希子 )



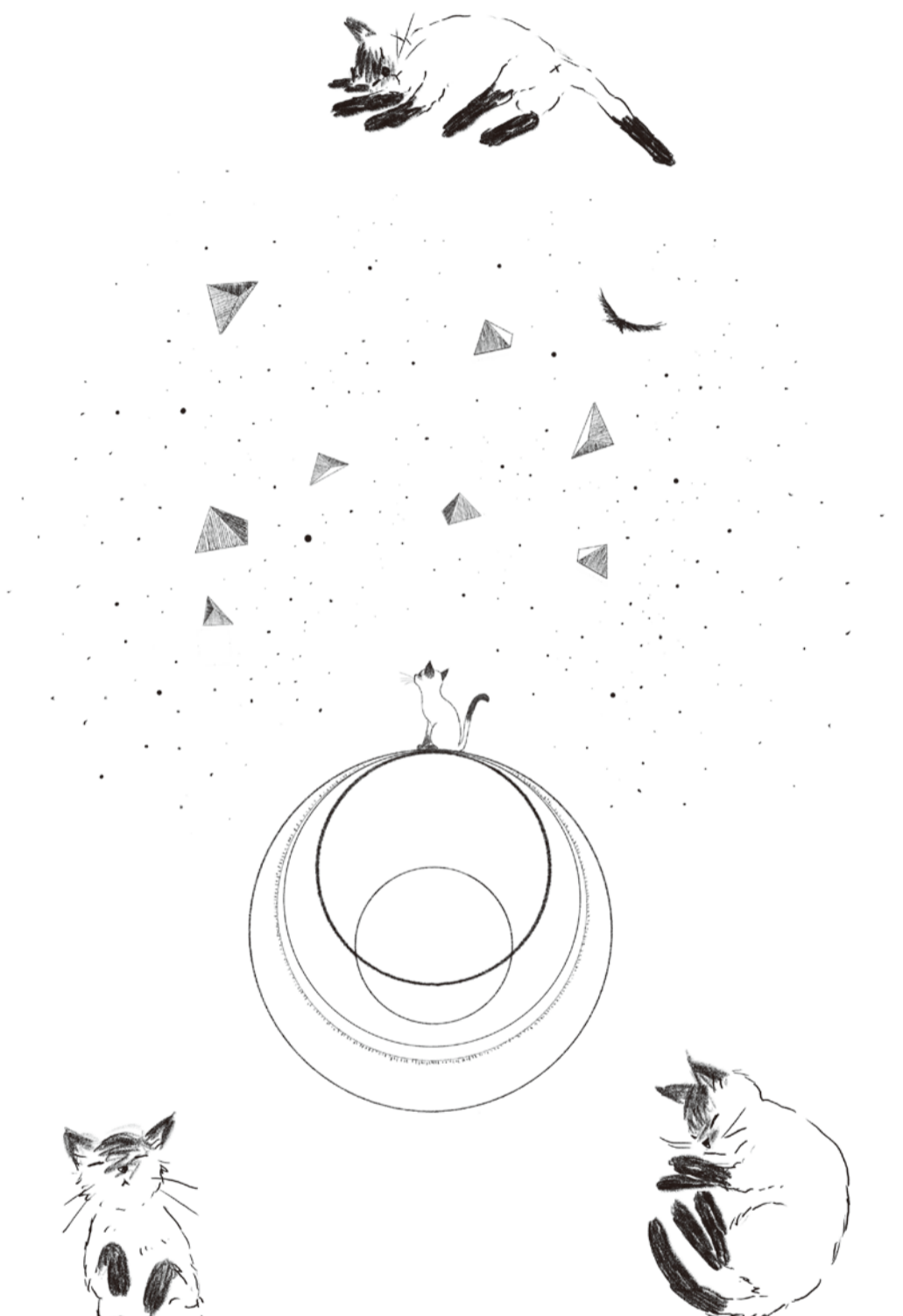
散歩する無意識 –松村康平映画評–

## 『TAR』 (2022) Todd Field

### 「伝記映画風フィクション」がもたらすマルチバース

ケイト・ブランシェットの圧倒的な演技力に貫かれた本作は、フィールド監督がブランシェットを念頭に当て書きしたという女性指揮者リディア・ターの伝記映画である。クラシック音楽の舞台裏や社会構造、ジェンダー・トラブルを主人公ターから片時も離れることのない主観的なカメラ視座（さまざまな登場人物を客観視する従来の全知的視点で構成される王道のハリウッド作品の在り方とは異なり、一人の人物を見つめ続けるという極めてミニマルな構成）によって浮かび上がらせる。ブランシェットはクランクイン前にドイツ語、ピアノ演奏、コンダクターのスキルを修練し、ボディダブルなしで演じ切って画面 / 空間に君臨し続ける。ジュリアード音楽院での授業シーンは圧巻で、ブランシェットが吹替なしで演奏するバッハ、学生を論破する高慢な教育者を見事に演じてリディア・ターが憑依しているとしか言いようのない有無を言わさぬ凄みで、緻密な撮影設計とオペレーションを伴う長回しカットを可能にしている。音響面では、ドイツ・グラモフォン全面協力のもとオケが鳴る瞬間、音響のギアが上がるように音圧が格段に増しディティールが豊かになる。特筆すべきはリハーサルシーンで、小節の断片を隣り合わせで何度も聴き比べることで、曲に対する指揮者の解釈がオーケストラに浸透し演奏が劇的に変わっていくさまは、音を見ているような不思議な感覚となって視覚情報とはまた別の解像度を深めている。

また「生の声」で語ることは何よりも大切です。声が大事なのではなく「うちのお父ちゃんの味、お母ちゃんの味」が何よりも大切なのです。言葉に障がいがある方は手話でOKです。  
 「何を読むかより誰が読むか」、「何を読んでもらうかより誰に読んでもらうか」、絵本とはそういうツールなのです。  
 11年前から京都市内の大学で絵本論という授業を担当しています。  
 2,000人も学生さん達と授業で出会い、読んでもらう事の答えをもらい続けています。  
 私は授業内でいっぱい絵本を読みます。すると頼んでもいないのに勝手に学生さん達が感想を書いてくれます。1回の授業で150人、1年で2,250枚もの感想が寄せられます。  
 そのほとんどが、子ども時代に絵本を読んでもらった思い出話です。「いつも母が途中で寝ていた」「姉妹で絵本の取り合いになって絵本がビリビリだった」「1年も同じ絵本を読んでもらっていたのに題名を覚えていません」等々。  
 そうなのです。絵本は「読み手の愛が勝手に伝わり、勝手に聴き手の心の奥深くに残り続けてしまうという、ひじょーに不思議な道具（ツール）」なのです！  
 子ども時代に大切なのは「愛された喜びの記憶」です。それが生きる力の元となるのです。  
 (えほん館代表 花田睦子)



とまれ、ここで詳細な前情報なしで本作を鑑賞していた筆者は、え、ひょっとしてリディア・ターって実在する人物なの？バーンスタインの弟子にこんな人がいたなんて不勉強ながら知らなかった…と惑わせるほど歴史的マエストロやベルリンフィルなどの団体名が実名でばっばん話題に上がり、あまつさえ登場人物たちとの交流関係が明らかになっていく。実在する / した人物とフィクションから生まれた人物を関係させ物語にもっともらしく組み込み現実を錯綜させる、映画と現実が双方向に影響を及ぼし合っており得たかもしれない別の世界を相対状態として創り出す。『TAR』の「伝記映画風フィクション」というスタイルは、今日ブロックバスターがこぞって採用するマルチバースもの（くしくもブランシェットはマルチバースをド直球で描いた『エブリシング・エブリウェア・オール・アット・ワンス』で主演をつとめたミシェル・ヨーにオスカーレースで競り負けたが）という手垢にまみれたSF概念を更新するリアリティを伴った新たなマルチバース手法としての可能性を秘めているのかもしれない。

( 松村康平 )